

年間第3主日・C年 (16. 1. 24)

「今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」

主を喜び祝うことこそ、力の源である

今日のみことばを、深く味わうために、まず、イスラエルの救いの歴史を、少し振り返って見ましょう。

紀元前 597 年に第一次バビロン捕囚として、ユダ王国の王を初めとする主だった指導者たちが、バビロン近郊に当時の占領政策によって、強制移住させられたのですが、その十年後の 587 年には第二次バビロン捕囚があり、連行されたイスラエル人の延べ人数は 300 人あるいは 1 万人とも言われています。

ところが、紀元前 539 年には、当時のオリエント世界に新たに台頭した^{たいとう}ペルシャ王キュロスが、首都バビロンを無血で占領し、捕囚民の帰国を許す勅令を出したのであります。

このように、50 年以上にわたる屈辱に満ちた捕囚から、異邦人の王キュロスによって解放されたとき、捕囚民は、彼を一人のメシアとあがめたのは、当然なことと言えましょう (イザヤ 45. 1a 参照)。

とにかく、帰国したイスラエル人が最初に取り組んだのは、言うまでもなく神の臨在の建造物神殿の再建であります。ですから、紀元前 515 年に再建された神殿を、実は、4 世紀前に二代目の王ソロモンが 7 年もかけてようやく紀元前 950 年に建てた神殿に対して、第二神殿と呼ぶようになったのであります。

しかも、今日の第一朗読が伝えるような神の律法を新たに翻訳し、まさに神の民の再出発を体験できたのであります。

そこで、このイスラエル共同体の再建の功労者であった祭司エズラと総督ネヘミヤが、主催した集会の感動的場面が、今日の第 1 朗読で次のように報告されております。

『今日は、あなたたちの神、主にささげられた聖なる日だ。嘆いたり、泣いたりしてはならない。』民は皆、律法の言葉を聞いて泣き出したからであ。彼らは更に言った。『行って良い肉を食べ、甘い飲み物を飲みなさい。その備えのない者には、それを分け与えなさい。今日は、我らの主にささげられた聖なる日だ。悲しんではならない。主を喜び祝うことこそ、あなたたちの力の源である。』

ちなみに、この二人のネヘミヤとエズラですが、まさにイスラエルの伝統的な宗教上の慣習をトーラー (律法) として集大成した人物であり、イスラエル共同体の再構築に甚大

な功績を遺したのであります。

しかも、そのとき、共同体に新たな活力を吹き込んだのは、今日の出来事からも確認できるように、神のことば、すなわち律法にほかなりません。つまり、律法の、「意味を明らかにしながら、読み上げた」からであります。

今日、実現した

次に、今日の福音ですが、ルカが伝えるイエスの初めての里帰りの出来事が、報告されております。ただ、今日の朗読箇所は、ルカ福音の冒頭の個所から始まっており、ルカによる福音書の献呈の言葉が、当時、使われていた文体で書かれております。

それから、今日の朗読箇所は、いきなり、4章の14節に移って、まず、「イエスは、” 霊 “の力に満ちてガリラヤに帰られた。その評判が周りの地方一体に広まった。イエスは諸会堂で教え、皆から尊敬を受けられた。」と、それまで述べたことと、次に述べることをまとめるルカの編集句で始まっております。

次に、16節からは、いよいよイエスの里帰りの報告に入りますが、この部分は、ルカ福音書全体の基本的構想を反映していると言えましょう。つまり、イエスの福音宣教は、確かに旧約聖書の成就にほかならないし、聞き手に拒絶反応があるのは、まさに預言者のいわば宿命にほかならないこと。また、それによってこそ、異邦人にまでも救が及ぶという神の計画が展開するのであります。

ここで、「いつものとおり安息日に会堂に入り」とありますが、イエスが、その後、安息日には、他の会堂をも訪問しては、説教をしていたことのいわば原型として描いているのであります。

ちなみに、安息日の会堂での礼拝ですが、シエマ・イスラエル（「聞け、イスラエルよ。」という申命記6章4節の信仰宣言で始まり、次に、祈りが続き、そして聖書朗読に入ります。そのとき、イエスに手渡されたのは、なんとイザヤ書の巻き物であり、しかも、イエスが実際に朗読なさったのは、ルカによれば、二か所からの混合引用つまり、61章の1節「主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、主がわたしに油を注がれたからである。主がわたしを遣わされたのは、捕らわれている人に解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、」を引用し、いきなり58章6節の「圧迫されている人を自由にし、」を挿入し、また、61章2節の前半にもどり、「主の恵みの年を告げるためである。」で終わっております。

実は、洗礼者ヨハネが、自分の二人の弟子をイエスのもとに送り、「来るべき方はあなたでしょうか。それとも、他の方を待たなければなりませんか。」と尋ねさせたときの、イエスのお答えも、「行って、見聞きしたことをヨハネに伝えなさい。目の見えない人は見

え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。」(ルカ 7. 19b-22) でした。

ですから、「貧しい人に福音が告げ知らされる」が、イエスのあらゆる宣教活動を総括していると言えるのではないのでしょうか。

しかも、今日の個所で、ルカが強調したいのは、神の救いのみ業は、イエスのよっていつも今日の出来事として実現していることにほかなりませ。

それは、すでに今日の第1朗読でも、繰り返されている「今日は、あなたたちの神、主に捧げられた聖なる日だ。」「今日は、我らの主にささげられた聖なる日だ。」と繰り返されていることに、見事にさかのぼるのであります。

また、今日の第2朗読で言われている「キリストの場合も同様である。・・・皆一つの霊をのませてもらった」と、これまたしっかりと繋がるのであります。

つまり、聖霊の働きによって、キリストの救いの御業は、いつも、共同体のただ中で、まさに今日化、すなわち現在化するのであります。

ですから、このミサにおいても、二千年以上前に実現したイエスの御業は、また、今日、この祭壇の上で再現するのであります。

この救いの神秘の現在化を、共同体ぐるみで深く豊かに体験できるように共に祈りましょう。